

会 議 録

会議の名称		令和 8 年度(2026 年度)第 1 回つくば市総合教育会議	
開催日時		令和 8 年(2026 年) 6 月 29 日 (月) 午後 3 時 00 分から午後 5 時 00 分まで	
開催場所		つくば市役所 5 階 庁議室	
事務局(担当課)		教育局教育総務課	
出席者	委員	五十嵐市長、森田教育長、倉田教育委員、和泉教育委員、 坂口教育委員、手打教育委員	
	事務局	《教育局》久保田局長、柳下副教育長、根本副教育長、柳町次長兼中央図書館長、勝村次長兼教育施設課長、森田次長兼学務課長、青木企画監 《教育総務課》山岡課長、小野村課長補佐、椎名係長、鈴木係長、高橋主任 《学び推進課》久松課長兼学校教育審議監、増沢学校教育政策監、東泉課長補佐、伏谷指導主事兼係長、本松指導主事、吉村指導主事 《一般社団法人 Hatch Edu》 甚上、石井	
公開・非公開の別		☒ 公開 ☐ 非公開 ☐ 一部公開	傍聴者数 3 名
議題		教育大綱を浸透させるためには	
会議次第		1 開会 教職員の働き方改革について(報告) 2 議題 教育大綱を浸透させるためには 3 閉会	

＜審議内容＞

教育総務課山岡課長：ただいまから令和 8 年度第 1 回、つくば市総合教育会議を開催いたします。本日の司会を務めます、教育総務課の山岡と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日、議題に入る前に教職員の働き方改革の進捗について、ご報告のお時間をいただければと思います。

教職員の働き方改革については、学校関係者を含めた教育局内での検討や総合教育会議での協議を受け、令和 8 年 3 月の教育委員会で承認をいただき、「つくば市立学校の教職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画」を策定しております。

今年度に入ってから取組ですが、まず学校に関しては、4 月に各学校長へ計画策定の周知を行うとともに、教職員の働き方改革について学校のグランドデザインへの項目反映や目標設定を依頼しました。また、新たに教職員の働き方改革について理解や浸透を深めるためリーフレットを作成しましたので、スクリレや PTA 総会、コミュニティ・スクールなどを通して保護者や地域住民の方への周知をお願いしております。また、市民、保護者向けには、4 月にホームページへ掲載するとともに、6 月 1 日発行の「広報つくば」でも紹介しました。合わせて、6 月 1 日には区会回覧も行っております。

また、庁内に対しても各課へ計画策定の周知を行うとともに、今後、教職員の働き方改革を進める上で関係部局の協力・協議を改めてお願いしております。現在、プロジェクトチームの立ち上げ準備をしており、推進メンバーとしては副教育長をリーダーに、教育局の各課長、そして校長先生をはじめとした先生方を含めたメンバーで構成します。今後、計画の進捗管理とともに、お互い協力しながら課題解決に取り組んでいければと思っております。

今後、総合教育会議においても 9 月に議題として取り上げ、進捗状況をご報告するとともに、先生方にもこの場に来ていただき、現状や課題を共有しながら「どのように働き方改革を進めればよいか」を議論できればと考えてお

ります。報告については以上です。

それでは、今回は「教育大綱を浸透させるためには」という議題で意見交換を行いたいと思います。本日の会議の終了時刻は午後 5 時を予定しております。議事録の作成にあたっては、AI 音声認識を使用いたしますので、ご発言の際にはマイクのご使用をお願いいたします。それでは、ここからの進行は市長をお願いいたします。

市長：その前に、リーフレットは保護者に強めに書いた方がいいという議論がありましたが、その内容は反映されましたか。

教育総務課山岡課長：はい、学校の先生方とも相談しながら決定しました。勤務時間外は留守番電話対応にすることや、学校外のトラブルはご家庭で対応いただくこと、個別相談は勤務時間内をお願いすることなどが盛り込まれています。

市長：現場の「肌感」として、これを配布した反応はどうでしょうか。

教育総務課山岡課長：今後さらに周知を進め、保護者の方々にも「教職員の働き方改革を進める」ことへのご理解、ご協力をいただけるよう努めていきたいと思っています。

市長：これはスクリレだけですか。

教育総務課山岡課長：ホームページや区会回覧、またコミュニティ・スクールの第 1 回会議でも、リーフレットを配布するようお願いしています。

市長：多少圧をかける意味でも、保護者に紙で配ってしまっても良いかなとも思いました。確実に保護者に見てもらう工夫が必要ですね。9 月にはまた、進捗の報告をしてもらうということですので、よろしくお願いします。

さて、今日は「教育大綱を浸透させるためには」ということで、学び推進課と Hatch Edu の皆さんも来てくれています。ずっと議論と実践を繰り返してきて、少しずつ浸透しているとは思いますが、今のうまくいっていることや課題を出し合って、より浸透させるための議論をしましょう。まずはプレゼン

をお願いします。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：学び推進課の伏谷です。よろしくお願いします。学び推進課より、令和 7 年度に実施した「幸せな学校づくりアンケート」の結果と、これに基づいた教育大綱の浸透と幸せな学校づくりに向けた今年度の具体的な取組についてご報告いたします。本日は、単なる数値の増減ではなく、見えてきた本市の課題に対してどのような手立てを講じるか、その方向性を中心に説明させていただきます。

まず、2025 年度の幸せな学校づくりアンケート結果の概要になります。4 年生から 9 年生を対象としたアンケートの回答率は 85%で、約 1 万 2836 人の回答を得ました。全体として多くの項目で昨年を上回る肯定的評価が見られ、教育施策の成果が着実に現れていると捉えています。「学校が楽しい」と回答した児童生徒は 88%で、学校が安心できる居場所になっている証拠です。一方で詳細に分析すると、「学んだことを実生活に生かす実感」が低かったり、「失敗を恐れて正解を急ぐ傾向」があったりと、質の高い学びへの転換にはまだ伸びしろがあります。スライドにある「赤字」は相対的に結果が低いものの、「青字」は高いものとなります。4 つの項目、教えから学びという文脈を拡大させたものが、次のページに載せております。「管理から自己決定」に関する質問項目 22 から 28 について拡大したものです。また、次のスライドは、非認知能力の再認識ということで 29 から 41 までを拡大したものとなります。私たちが目指す教育の羅針盤は、教育大綱に掲げる 4 つの転換と考えております。これまでの学校教育にありがちだった教員が指導して知識を教え込むスタイルから子供たちが自ら問いを持ち、探求する学びへの転換、そして、ルールや時間割で子供を縛る管理から、子供たち自身が環境や方法を選ぶ自己決定の転換だと考えています。これらを支える土台として、自己肯定感や他者受容といった「非認知能力」を重視し、「失敗しても大丈夫」「自分は大切にされている」と思える環境があって初めて、主体的な学びへの転換が実現

すると考えております。

今回のアンケート結果から、相対的に低い6項目を抽出しました。

まず「学び方の自己選択」についてですが、自分に合う学び方が分かっているという数値が伸び悩んでいます。これは授業での自由度や自分の学び方を振り返る時間が不足していると考えられます。対策として、自分のペースで学習を計画する自己調整学習の支援や、ICT 端末などを自ら選択できる指導の個別化を進めていきたいと考えております。指導主事が学校現場で先生方と一緒に授業を作る伴走支援でも促していきます。

次に、試行錯誤の促進です。子供たちが間違えることを恐れ最短ルートで正解だけを求めるという傾向が見られます。この背景には教員側が時間内に予定された内容を教え切らなければいけないという焦りから、子供がじっくり考える時間を奪ってしまっている現状があります。今年度はこの教え切る授業からの脱却を図り、授業の設計を子供自身のアウトプットや対話の時間を中心としたものへ転換していきます。

さらに重要なのは、学級の中に間違えることは新しい発見の第一歩であるという文化を育むことだと考えます。失敗が賞賛される学級づくりを研修など通じて全校に広げていきたいと考えています。

スライド進めまして、「あなたの考えや意見が大事にされていると感じる」について説明いたします。これは子供たちの自己肯定感や、主権者意識の根幹に関わります。具体的な取組として、校則や学校の約束事を子供と教員、時には保護者を交えて、対話でアップデートしていくルールメイキングの活動を推進したいと考えています。身近なルールや学校をより良くするための取組を自分たちで決める経験が、自分の声には社会を変える力があるという実感に繋がると思います。併せて、全校的な対話活動の時間を確保し、人間関係づくりの基盤を固めます。さらに客観的データである「i-check」の効果的な活用、学級経営の課題を早期に可視化して、誰もが安心して発信できる環境を

科学的にアプローチしていければと考えています。私からの説明は以上になります。

学び推進課吉村指導主事：学び推進課の吉村です。ここからは、課題改善の具体的取組を説明します。

1つ目は、学校訪問による授業作り伴走と各教科等の研修講座の開催についてです。児童生徒の問いから始める課題設定目的の明確化、学び方や学習の進め方を子供自身が自己決定する場面の設定、試行錯誤やアウトプット、振り返りの充実など、主体的な学びに向かうための様々な視点を、学校の先生方と共有し、授業の改善に繋がります。

2つ目は、ルールメイキングです。一人ひとりにとって幸せな学校を作るためにできることは何だろうという視点から、児童生徒の思いや考えを引き出し、話し合いによって合意形成と繋がっていきます。写真はモデル校での授業の様子です。モデルとなる授業を参観し、効果的な取組を各学校で展開することで、互いの意見を尊重し合える学級の風土を築いています。

3つ目はグループワークの推進です。児童生徒が安心して自己を発揮できる雰囲気づくりのために、よりよい人間関係の構築を目指し、グループワークを推進しています。具体的には、友達と手でリズムを合わせる手合わせや、サイコロで決まったお題をもとに会話をするサイコロトークなど、相手を理解したり、自己を開示したりする様々なエクスエクササイズが用意されています。こうした取組をすべての学校で、年間を通じて実践することで、互いが大切にされているという気持ちの向上に繋がってまいります。

4つ目は、問いから始める授業づくりの促進です。児童生徒が学ぶ楽しさを感じるためには、自分の気づきや問いが解決したい学習課題と結びつけることが大切です。そのためには、先生たち自身が良い問いはどのような問いなのかを自問し、子供の問いを引き出したり、それらを学習課題へと結びつけたりする力量を高めていく必要があります。そこで、学び推進課では、問

いから始める授業をテーマとした研修用の動画を、学校と協力して作成しました。この授業動画は、ちょうど今月末に完成し、各校の校内研修等において活用を予定しています。

5つ目は、つくばスタイル科のブラッシュアップについてです。今年度より、つくばスタイル科では、児童生徒の好きや得意を伸ばす、探究学習を進めるための時間を拡充しました。各学校が児童生徒や地域の実態に応じてカリキュラムを編成しやすくなりました。その上で、保護者や地域との協働による、探究学習を実践し、好事例を横展開していきます。また、現在は学び推進課が中心となって、探究学習のヒントとなる効果的な指導方法についてのガイドを作成しております。

学び推進課本松指導主事：学び推進課本松です。ここからは、アンケート項目の改善以外に課として取り組んでいることについてお話をさせていただきます。まずは、教育大綱の確実な浸透に向けた、教育長、副教育長及び学び推進課の一体的な取組について説明いたします。

まず、教育長におかれましては、学校訪問を通じて把握した課題を、全校へフィードバックするとともに、市教育研究会等での講話を通じて、大綱の理念を直接教職員へ発信しております。この教育長の方針を受け、副教育長は、管理職に対して、学校経営や人材育成に関する具体的な助言、支援を行っております。また、私ども学び推進課指導主事は、学校訪問での伴走支援に加え、各種研修講座を通じて、先生方の授業づくりや学級づくりの支援に取り組んでおります。

次に、今年度からの新たな取組である副教育長訪問について、実施の背景やねらい、具体的な取組について説明いたします。これまでは指導主事による授業改善や校内研修における伴走支援を継続してまいりました。一方で、各学校においては、若手教員の育成やミドルリーダーを中心とした組織運営、教職員の多忙感の軽減など、学校経営に関わる構造的な課題も散見されてお

ります。そこで今年度は、学校管理職へのアプローチを通じて、これらの組織的課題を解決し、教育大綱の具現化をさらに加速させるため、副教育長による学校訪問を実施しております。具体的なアプローチをスライドにお示しいたしました。まず副教育長が、学校長のビジョンを丁寧に聞き取りし、アンケートなどの客観的データに基づき、実態を把握します。その上で、具体的なアクションプランの立案までを伴走支援し、定期的な訪問を通じて、実効性を確認しながら、助言を継続してまいります。副教育長が管理職の良き相談相手となり、組織の活性化を図ることで、本市が掲げる幸せな学校づくりをもに実現してまいります。

続きまして、教師同士の対話の場の設定について説明いたします。昨年度末に完全希望制で、教師同士が自由に対話できる場として、つくばティーチャーズベースを試験的に実施いたしました。この取組は、先生方が立場や年齢を超えて語り合う場です。人的ネットワークを構築し、多様な実践を共有することを目的としております。昨年度の試行を踏まえ、今年度も先生方のチャレンジを促せるよう計画しています。

これらの市の方針を受けて、各学校でも大綱の推進に向けて工夫をして取り組んでいます。各学校では、市のアンケートをはじめ、複数のデータから現状分析し、目指す姿や手立てを協議しています。各学校で話し合ったことを、学校改善シートにまとめることで、ビジョンを共有し、校内での共通実践に繋がっています。その他、授業改善や学校経営について、スライドに示しました内容を通して、授業改善と学級経営の充実の両方に力を入れることで、課題の改善に取り組んでいます。本日は、大綱のさらなる浸透に向けて、本課の取組やその方向性について、ご助言をいただけますと幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

市長：ありがとうございました。内容の確認や質問の前に、少し気になったのは、先ほどの「問いから始める授業」の動画は、どれくらいの長さでしょう

か。

学び推進課吉村指導主事：全て合わせて 30 分程度です。

市長：冒頭 10 分程度見ることはできますか。どういうものが研修として使われているのかを見れば、ここでの議論もイメージしやすいと思いましたので。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：6 月 30 日に納品予定なので、この場にはありません。

市長：わかりました。動画内ではどのようなことが扱われているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：先生たちがどんな思いで授業を作っていきたいか、子供たちからどんな問いを引き出したいかというモノログが 2 分程度、その後、実際の授業場面、指導主事との振り返り、そして子供たちがその授業を受けてみての反応など、生の声も入った内容で構成されています。国数理社の 4 教科で配信予定です。

市長：ありがとうございます。質問あればどうぞ。

手打委員：分析について確認させてください。アンケートの対象は 4 年生から 9 年生で 1 万 2 千人ほどですね。このアからカについて、観察されましたか。課題が反映された児童生徒の様子など、それを見出している要因は、どのようにまとめられたのですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：我々指導主事が学校を訪問し、子供たちの授業の様子を直接観察したり、先生方とヒアリングや対話をしたりした内容に基づいて整理しました。

手打委員：なるほど。では、先生方から出た特徴的な部分をまとめられたという理解でよろしいわけですね。ただ、4 年生から 9 年生まで一律ではなく、学年ごとの特徴、例えば 4 年生レベルの課題、9 年生レベルの課題などが分かると、より理解しやすいですね。

市長：大事な視点ですね。学年ごとや性別ごとの特徴は、各学校に返されているデータから見えてくるのでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：はい、学年や学校ごとの傾向は捉えられます。

幸せな学校づくりアンケートは、各学校によっても学校の実態に応じて、結果が異なっておりますので、各学校でアンケートから読み取れる低い数値に関しては、背景にあるものは何かといったようなことを、各学校で分析した上で、その手立てを講じていけるように、我々学び推進課も訪問させていただく際、伴走訪問支援においても、分析の細かい部分も確認しながら、各学校の実情を捉えているというのが現状です。

手打委員：ぜひ、各校各学年の特性もそのうち共有してください。もう 1 点、教師の対話の場に参加した先生方の反応はどうでしたか。

学び推進課本松指導主事：先生方の振り返りを書いていたきました。普段話す機会のない先生方と話せて有意義な時間になったというお話や、自分のやりたいことが後押しされたというような前向きな振り返りをいただいています。

手打委員：何名ぐらい応募がありましたか。

学び推進課本松指導主事：当初は 16 名程度募集がありましたが、年度末の放課後開催ということもあり、実際は 10 名程度の参加となりました。

手打委員：ということは、かなり熱心な先生方が集まったということでしょうか。

学び推進課本松指導主事：そうですね。

手打委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：他にはいかがでしょうか。どうぞ。

坂口委員：アンケートについて、1～3 年生には実施していないのですか。また、質問項目の具体的な言い回しが知りたいです。学校が楽しいと言っても、授業なのか休み時間なのかで意味合いが異なると思います。

学び推進課吉村指導主事：ご質問ありがとうございます。市全体としては 4 年生以上ですが、学校によっては 1 から 3 年生向けに平仮名にするなど言葉を

噛み砕いて独自に実施している例もあります。

坂口委員：とすると、その結果は市全体の結果に追加しているのか、学校単位で集計しているのか。

学び推進課吉村指導主事：あくまでも学校独自で行っている調査になります。

坂口委員：1年生から3年生を市全体として取らない理由は何でしょうか。

学び推進課吉村指導主事：学習用端末でとるため、コンピューターの操作が得意な学年となると4年生以上ぐらいからであれば、確実に取ることができるためです。

坂口委員：わかりました。ありがとうございます。

学び推進課吉村指導主事：もう1点質問のありました項目ごとの設問についてですが、細かな設問につきましては最初のページに反映されております。

手打委員：そうしますと、ここにあるのは質問項目の一部かと思っていましたが、これが質問項目ということですかね。

学び推進課吉村指導主事：そうですね。

手打委員：選択肢はどのように用意されていたのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：項目に対して、4つの程度を表す選択肢が用意されているような形です。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：1点だけ補足させていただきます。質問は「学校生活の中の以下の時間について最も当てはまるものを選んでください」という形式で、授業、休み時間、行事、委員会などを4件法、「楽しい」から「楽しくない」までで聞いています。他の項目も、質問内容に応じて「当てはまる・当てはまらない」の頻度を聞くなど、一部選択肢を工夫しています。

手打委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：学校が楽しいというのも大問で聞いているのですね。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：そうです。シンプルに最初に細かい授業の実感を聞く前に学校が楽しいかどうかを聞いています。

様式第 1 号

和泉委員：今の件に関して、後ほどタブレットでアンケートの画面を見たいです。要はこれだけの数の設問をどう見ているのか把握したいなと思いました。実施時期はいつですか。

学び推進課吉村指導主事：おおよそ、10 月から 11 月にかけての 1 回です。令和 6 年度から経年で取っております。

倉田委員：データの結果は大切ですが、それが一人ひとりの教員にフィードバックされ、自己分析に繋がらないと意味がありません。学校独自で分析や関連性の把握は行っていますか。

学び推進課吉村指導主事：はい、各学校では独自の学校評価アンケートも実施しており、年末に教員・保護者・児童生徒の声を反映させて次年度の教育活動に反映させています。また、各校で「授業改善シート」の振り返りも校内研修等で行っています。

和泉委員：回答率は何％ですか。

学び推進課吉村指導主事：児童生徒の回答率は 85％でした。

和泉委員：タブレットで行うということは S ルームや不登校、特別支援学級の子供たちにも同じ形態でアンケートは届いていると考えていいでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：はい。

和泉委員：回答率 85％とのことですが、残りの 15％の子供たちの置かれている状況に注力すべきではないでしょうか。2024 年に取った時よりは回答率は上がっているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：上がっています。

和泉委員：わかりました。ありがとうございます。

市長：回答時間は、みんなで取っているわけではないのですか。

学び推進課吉村指導主事：学級活動で必ず取るようにという周知はしております。ただ、この時期に学級閉鎖やインフルエンザなどの影響で回答できなかった子もいます。回答期間を延ばし、各学校に働きかけたのですが、85％が昨

年度では限界でした。

和泉委員：誰が答えていないかの把握はできているのでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：Hatch Eduさんは把握できているかと思いますが、教育局では把握はできないようになっています。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：補足すると、アンケートの結果自体は、教育局が持っています。しかし、子供がアンケートに回答することで、不利益になってはいけないという発想のもと、子供の名前が分かっている状態ではありますが、学校側にフィードバックはしていません。

和泉委員：答えることができているかできていないかを把握することはすごく大事だと思いますし、答えていない子の属性を把握することは重要だと思います。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：現在、他のデータベースとの紐付けにより、属性ごとの分析を進めているところです。

市長：他はいいのでしょうか。

森田教育長：学校へのデータの戻し方について説明をお願いします。

学び推進課吉村指導主事：学校へのデータの戻し方につきましては、学校ごとの PDF を作成いたしまして、それぞれ管理職の先生方にメールでお知らせし、管理職の先生方から、一般の先生方に共有をしていただいて、各校内研修等で、そのアンケートの分析を、対話を通して行うということを各学校で行っております。

市長：それは、どういう濃淡で行っていますか。まず、学校全体で共有されるわけですね。それは、全体の対面で行っている感じでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：学校での校内研修はやり方は様々ですが、例えば、4年生の結果を1年生と4年生の先生方が集まって分析をしたり、グループを組んで、対話形式でそれぞれの課題等を話し合い、次年度の教育計画に反映させるという研修の仕方が一般的かなと思います。

市長：例えば、クラスの担任レベルでどれくらい分析しているかはその先生頼みでしょうか。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：学年単位です。理由は、小規模校などは、回答が想定できてしまうということもあったので学年単位にしています。また、学年全体で考えて欲しいという教育局の先生方の意見もありましたので、そうしています。

市長：学年の先生たちは集まって議論をしているはずということでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：私や石井さん、副教育長も各学校を回ってこのアンケートの分析はどのようにしていますかと聞いたり、実際にワークショップに加わって、講師役を石井さんに務めていただいたりというような学校も 5 校ほどありました。

市長：皆さんの感覚として学校で独自に分析をして、見立てが良いとか、それによって何か対策が生まれているという実感はどの程度ありますか。

学び推進課吉村指導主事：特に、令和 7 年度は、その前の年からの経年変化がありましたので、学校の強みであったり、或いは力を入れるべき部分がよく見えたので、先ほどお話しました授業改善シートの中にも、表れている学校が多いなという印象を受けております。

市長：わかりました。確認はこの程度にして、現場の課題感について聞いていければと思います。浸透させる上での壁は何だと感じていますか。それぞれ先生方から現場を回っている感覚などをお聞きできますか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：子供が本当に思っていることをどれだけ先生方が理解しているかという部分に課題があるのではないかと考えております。例えば、先生方で、授業改善や学級運営などの手立てはどの先生も行っていると思います。一方で各種アンケートの結果を見ると、子供の声が先生方の取組とズレていたりします。先生方はやっていると思っても、そこが子供たちに伝わっていない。その伝わっていない部分が何なのかという

ところを、もう少し細かく、子供の対話を通して見とっていかないと、やっている取組が、効果を示していかない。本質の部分が若干ズレてしまっているのかなと見受けられます。

市長：それは、先生の満足度は高いけど、子供は低いみたいな部分と一致する話でしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：まさにそうだと思います。

市長：学校の 4 象限の分類に近い話ですね。学校名が出ない形で出せますか。

先生も子供も高ければとても良いが、どちらも低ければ、相当てこ入れが必要になると。少し、簡単に説明してもらってもよろしいですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：幸せな学校づくりアンケートの子供たちの結果と、先生方の結果を総合的に分析したものです。エリア 1 に分類される学校は、先生も、子供たちも非常に生き生き、伸び伸びと、学校生活や学びたいことを学び、より充実度が高い学校が、このエリア 1、2 に分類されます。エリア 3、4 とありますが、エリア 4 である一番左下の部分は、子供たちも、先生方もつくば市内で相対的に見て意欲が低下している状態ということになります。エリア 2 の学校に関しては、子供たちの意欲は比較的高いけれども、先生方の意欲が低いという状態です。先生方のやる気、働きがいが必要になってくるのがこのエリアです。次にエリア 3 につきましては、先生のやる気は高いけれども、若干子供たちのやる気が低いのが、エリア 3 になります。エリア 3 については、子供たちの思いをしっかりと酌み取れるようになると、エリア 1 にシフトしていくと思われれます。特に我々が行っている学び推進訪問や学校訪問での伴走支援をより注力することでエリア 1 に上げれるよう取り組んでいます。

市長：ありがとうございます。やはりエリア 1 にいることが理想ということは前提として、学校ごとに個別に対応していくことが 1 つのアプローチになるかとは思いますが。先生方が伴走支援等を行うプロセスの中で、どのような課

題感があるかということを知りたいと考えています。

森田教育長：こちらは、市の平均になりますので、どう頑張っても 4 象限のどこかに入ってしまう。すべてがエリア 1 になることはないですが、そのような中でエリア 1 の中でも大きく改善した学校があるので、その学校をよく調べれば、大きなヒントになるのではないかとということでその部分を調べていこうと動いています。

市長：去年、エリア 4 から 1 になった学校もありましたか。それはさすがになかったですか。森田さんの言う通り、相対的なものであると同時に絶対的な数値の比較もできるので、数値自体を上げていければ良いかなと思います。これらの話題をディスカッション材料として、吉村先生が思う課題感をお伺いできますか。

学び推進課吉村指導主事：伏谷指導主事も申し上げておりました子供たちと学校の先生たちとのズレでしょうか。教えたい、身につけさせたいと思う力と子供たちが実際にやりたい、自分自身で解決したいという思いのズレみたいなものが各授業や学校行事で出てくると、「やらされ感」や「つまらなさ」に繋がってしまうのかなと感じます。そこを全部、子供たちに投げてしまうのではなく、どのように子供たちと対話をして、「どのようなことをこの単元ではやろう」とか、「今日の授業のゴールは何か」と問いかけながら、うまく授業が進んでいくといいなとは考えております。

市長：仮説でいいので、ギャップはどのような部分で生まれる傾向があると感じますか。

学び推進課吉村指導主事：やはり、授業が上手な先生は、子供たちとの対話を大事にしていると感じます。授業参加を実際にしてみると「今日の課題はこれだよ」「ノートに移してね」といった取組はしません。子供たちに何か気づいたことがあるかを問いかけ、解決してみたいという気持ちを持たせた上で、かつ、授業の課題に取り組んでいくと、一緒になって解決していこうとする。

子供たちと一緒に学ぶ。そのような姿勢を持った先生方が、授業を見ていて、上手な先生だなと思います。

市長：先生方が変わらない要因は何だと思いますか。

学び推進課吉村指導主事：やはり、限られた時間の中で教え切らないといけないという先生方の焦りや不安からではないかと考えています。

市長：以前もお聞きしましたが、授業ができていない先生とそうでない先生の割合は肌感覚でどの程度でしょうか。

学び推進課吉村指導主事：難しいですね。できている先生は、2割程度よりは多いかと思います。

市長：そうですか。後で統計的な数字を確認するとして伏谷先生はいかがでしょう。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：51校回らせていただいている中で、1割は大変厳しい見方だと思います。実際に各学校にリーダーになる人材を作ろうということで動いておりまして、私としては2割から3割ぐらいかなと思います。ただ、努力している先生はいます。努力している先生方の数値は、幸せな学校づくりアンケートの結果の「どれだけ理解しているか」という質問項目で6割の先生が理解していると答えています。この数値は私的には少ないと思っていて、100%言ってほしいという思いでした。

市長：分析は大事ですね。やる気はあるのか、それともわからないだけなのか。それによってもアプローチは全く異なりますからね。例えば、学校差みたいなものはあるのでしょうか。

森田教育長：現実にはございます。それらを無くすために、根本のほうでも人事面で配置を変えるということを政策に打ち出しています。

市長：ここまでの議論について、根本さんどうでしょうか。

根本副教育長：約2割が、人事異動で変わります。1,700人ちょっといる中で新規採用が100人を超えて、市内外での異動もいるので、2割変わった中での

浸透度合いは、かなりリセットされてしまい、難しさを感じます。ただ、学校の中心的な役割を担える先生方の配置をすることで、学校全体が大きく変わることもあります。小規模な学校ほど、1 人の影響力が大きいと、学校訪問をしていて感じる部分があります。人的な部分でのサポートは、必要であると感じています。

先ほどの 4 指標についても平均値なので、どうしても前後左右が同じ学校数になります。来年以降は、現在の指標を残したまま、パーセンテージの数値で見えていくといいのかなと思いました。

市長：そうですね。それは、データマスターの石井さんがいろいろとやってくれると思いますので、いろいろな角度から分析できればと思います。本松先生はどうですか。同じじゃなくてもいいですよ。

学び推進課本松指導主事：はい、ありがとうございます。私はアンケートで示しましたアの部分です。「自分に合う学び方がわかっている」というところで、先生方一人ひとりに合う学びになるよう工夫してくださっておりますが、教室にはいろいろなお子さんがいます。ですので、みんなが同じペースや方法でというのが難しい状況になっています。それをいかに一人ひとりが学べるようにするか試行錯誤をしてくださっているなと思っています。ただ、昨年から伴走をさせていただいている中で、先生方の意識はどこの部分を子供たちに任せようかと本当によく考えながら、授業を作ってくださっていると感じます。伸びしろと思い、チャレンジを応援したいと思っている点です。以上です。

市長：どんな応援を一番やっていきたいですか。

学び推進課本松指導主事：一番というのは難しいですが、いろいろな学校を見させていただいているので、良い手立てを伴走の中で提案していくことを心がけています。例えば、「こんな場面でこんな取組をしている先生がいました。こんな子にはこんな方法があるかもしれません」という私からの提案も

ありますが、その学校の先生方、チームで授業を作ってくださっているの、それぞれが取り組んでくださっていることがあります。なので、この場面では、どんなことできそうですかと、一緒に話し合いをすることで良いアイデアが生まれることがあります。

市長：はい、わかりました。今3人からありましたが、副教育長たちからも、学校を回っていて感じる課題感をいただいて、そのあとで皆さんからそれを踏まえての質問やディスカッションにしていこうと思います。

柳下副教育長：私の課題感は、3人の指導主事が伝えてくれたことと重なる部分もありますが、3つあります。まず1つ目は、先ほど4象限の表についてです。結局は1つ1つの学校に課題があって、それぞれその課題は異なるという現実です。この異なる51校の課題に、向き合うことが非常に大変だと思います。51校それぞれの課題が違うのに、1日1校ずつ回っても51日かかってしまいます。1年でどれだけ回れるのかなという思いでいます。できるだけたくさん回数を重ねて回りたいというのが私の中の課題です。

2つ目は、4象限のエリア3への支援です。ある学校の話ですが、子どもたちの様子はあまり良く見えないものの、先生たちは非常に頑張っています。先生方は毎日研修や授業参観を重ねながら、自分たちの学校をより良くしようと努力しています。しかし、その努力がなかなか子どもたちに反映されず、厳しい状況にあります。私はそうした学校を訪れた際に、その意欲を支えているものは何かを観察します。すると、その学校では子どもたちの意欲や学力は低いかもしれませんが、先生同士の仲が非常に良く、職場環境としては働きやすいことが分かります。みんなが共通の課題に取り組つつも、先生たちの意欲は決して下がることなく、頑張り続けているのです。このような学校は、非常に応援したくなります。ただし、このような場合、先生たちの間の良好な関係は理解できても、子どもたちの思いとは乖離していることが課題です。先生方の意欲的な発言があっても、子どもたちはそれに動かされないという

現実があります。つまり、先生たちの思いと子どもの実態には大きなギャップがあり、ここに改善のポイントがあります。2つ目の課題は、先生たちの集団はとても良好ながら、子どもたちの実態をもっとしっかり見ていく必要があるということです。先生たちの思いが強すぎると、かえって子どもたちとの間に距離ができてしまいます。このことに気づかせることが、とても重要です。

市長：ちなみに分類は、各学校には伝わっていますか。自分たちはここにいるとわかるようにはしていますか。

柳下副教育長：見せております。副教育長の訪問で、校長先生にお見せしています。大抵悪い学校さんは、非常にがっかりしますよね。でも現実を知ってもらうためには、見せる必要があると思っております。

市長：そうですね。

柳下副教育長：3つ目の課題として、教員の資質・能力に関する問題を感じています。現在、毎年100人を超える新任教員が各学校に配属されていますが、その初日からつくば市の教員としての方向性をしっかり伝える必要があります。教育長は年度初めに直接お話をされており、すべての教員がその話を聞いています。しかし、アンケート調査の結果、教育大綱を理解している教員は約60%にとどまっているという現実があります。これは教育長がお話しするだけで満足してはいけないことを示しています。この60%を100%に引き上げるためには、人が変わっても様々な角度から教育大綱を教員に示していく必要があります。例えば、教えから学びへの部分に焦点を絞って話をするなど、多様な方法を取り入れながら、今年度は学校ごとに応じた内容で指導を行いたいと、副教育長として考えています。教員の資質・能力向上においては、もちろん核となる教員の育成を重視していますが、それ以外の教員の能力も底上げすることが非常に重要だと考えています。

根本副教育長：1つ目の課題は、教職員組織としての機能を十分に果たすこと

です。吉村指導主事も述べていましたが、子どもたちとの対話が重要であることはもちろんですが、職員室内での先生同士の対話も欠かせません。悩みや課題を自由に話し合える雰囲気をつくるのが、学級や職員室といった組織が円滑に機能するために非常に大切だと考えています。そのためのアプローチが必要です。2つ目は、管理職の考えが一般の先生方にしっかりと伝わっているかどうかです。管理職が熱心に取り組んでいることが、その思いが十分に伝わっていないことが時折見受けられます。教職員からの意見を積極的に吸い上げ、双方向のコミュニケーションを図ることが求められます。また、先生方は教育大綱の「管理から自己決定へ」「教えから学びへ」といった文言は理解しているものの、実際に子どもと関わる際にそれらの言葉が具体的な行動や指導にどう結びつくかが見えにくいことがあります。言葉だけが残し、実践が伴わないことのないよう、常に自問自答しながら子どもと関わるのが重要だと、学校訪問の際には必ず伝えていきます。最後に、先ほど柳下副教育長も触れていたように、働き方改革に関連して教職員のスキルアップが必要です。スキルアップすることで業務の時間短縮が図れ、それが働き方の改善につながります。今後は、働き方改革とスキルアップを同時に進めていくことが大切だと考えています。

市長：久松先生もお願いします。

学び推進課久松課長兼学校教育審議監：はい。私は昨年度まで現場におり、主に中学校での勤務が中心でした。その中で最も課題と感じたのは、子どもたちに何を学ばせたいかという目的に沿った発問を、先生方がどのように考えるかという点です。中学校になると学力の差が広がりやすく、そのため指導がどうしても「教え主体」になってしまう傾向があります。これに対して、子どもたちが主体的に学べるような問いかけが重要だと考えていました。また、中学校の場合、受験がゴールの一つにあるため、点数を上げることも求められます。しかし、同時に子どもたち自身に学びを委ねるという勇気も今後必

要だという課題感を感じていました。これらの考えは伝えてはいるものの、現場での実態とはまだ大きなギャップがあると感じています。以上です。

市長：ありがとうございます。増沢先生からもよろしいでしょうか。

学び推進課増沢学校教育政策監：学び推進課の増沢です。私は大きく2つの課題を感じています。1つ目は、「学校が楽しい」ということを最も大切にしている点です。その要因として、「学校に安心できる居場所があること」と「自分の考えや意見が大切にされること」という2つのアンケート項目が大きく関わっていることが分かっています。このことから、いじめのない、違いを認め合える環境づくりが非常に重要だと考えています。したがって、教職員には子どもの権利を改めて認識してもらい、教育長も言及したようにグループワークなどを通じて良好な人間関係づくりを促進する取組を大切にしたいと思っています。

2つ目は、教育大綱で重視されている「問いから始める学び」の促進です。先生が課題を与えるだけでは、どうしても子どもが受け身になりがちです。しかし、子ども自身の問いから学びが始まることで、主体的に学ぼうとする姿勢が生まれます。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。これは自分の人生を自分で舵取りする意識の芽生えに繋がります。今回は、研修動画の作成も進めており、それを活用しながら教職員の教育観も変えていければと思います。

市長：はい。ありがとうございました。いろいろと出ましたので、今、先生方から聞いたことに対しての質問や意見、提案などあればどうぞ。

手打委員：いろいろな学校の取組についてお話を伺い、大変まい考になりました。ただ、今日の会議を通じて少し違和感を感じた点があります。教育大綱を基にしてつくば市の学校改革を進めるにあたり、子どもたちと最も接する先生方が意欲を持ち、力量を高めることは非常に重要だと思います。一方で、先生方は年間のカリキュラムや授業時間をどうこなしていくかという課題に常に直面しています。その結果、時間内に授業を完結させようとする、子ども

たちと十分な対話や関わりの時間が確保できない現実もあるのではないかと感じています。この問題を解決するために、各学校では校長先生を中心に教育目標を設定し、その目標を各学校のカリキュラムにどう反映させているのかが重要です。しかし、今日の議論では、校長先生方が教育大綱をどのように捉え、学校のカリキュラムにどう生かそうとしているのかが見えてこない印象を受けました。先生方一人ひとりの努力や能力だけでなく、それを支える学校経営や組織としての合意形成が鍵となります。教育大綱のすべての目標を全校で達成する必要はなく、それぞれの地域や学校の状況に応じて重点を置くべき分野を決めることが望ましいと思います。ただ、現状の議論ではその具体的な方向性が十分に示されていないように感じました。

市長：これは誰が答えましょうか。森田さん、どうでしょうか。校長の役割はどうなっているのか。

森田教育長：まさに手打先生おっしゃった通りだと思います。副教育長ともよく話しているのは、今年の重点をしっかりと学校内で共有し、学校の教育目標としてしっかり掲げ、実践できるようにすることが、最も大切という共通理解のもと、各校を回っていただいています。なので、教育大綱から学校の教育目標、学年の目標、個人の目標とすべてが連鎖するような考え方で取り組んでいます。

市長：副教育長は、校長とコミュニケーションをとる機会が多いという認識で合っていますか。

森田教育長：そうですね。

柳下副教育長：手打先生がおっしゃったように、教育大綱の理念に向かって進むためには、各学校の教育目標がその理念に沿ったものでなければ、一貫性が保てません。方向性が異なれば、統一感が失われてしまいます。そのため、校長先生が理念の理解と実現において最も中心的な役割を果たすことが重要だと考えます。また、教育理念の実現は、単に掲げるだけではなく、各学校の

課題解決に取り組むことが必要です。今年度は、課題の解決に向けて校長一人で考えるのではなく、職員全体で組織の力を生かし、何ができるかを協議し取りまとめていきます。この取組は、学校改善ワークシートなどに反映され、今年度どのような課題に取り組むかが教職員にわかりやすく示される仕組みとなっています。したがって、教育大綱の理念と学校目標は別物ではなく、しっかりと関連づけられています。

手打委員：この学校改善シートというのは、どのように作られているのでしょうか。今は作成中ですか。

柳下副教育長：いえ、今年度は5月に提出期限を設定しています。これまでは単年度ごとに各学校が独自に計画を立てていました。しかし、幸せ度アンケートの結果や経年変化が明らかになってきたことから、昨年度のうちに各学校の課題を把握し、分析することが可能となりました。具体的には、昨年度末に副教育長が校長と面談を行い、学校改善シートの作成に向けて見えてきた課題の整理と分析を実施しました。こうしてまとめられた内容を基に、今年度の学校改善シートを作成する流れを初めて確立したのです。この仕組みによって、たとえ校長や教頭、その他職員が異動で変わっても、昨年度の課題を引き継いで今年度の計画に反映させることができ、計画の途切れや矛盾なく継続的な改善が図れると考えています。

手打委員：「教育大綱のさらなる浸透に向けて」がテーマです。今日の話の大半は、授業の構築や先生方の問題に関する内容が多かったと思います。しかし、私としては、教育大綱を浸透させるためには、組織として各学校が進めていく上で、「学校改善シート」が教育大綱とどのように繋がっているのかを明確にすることが重要だと考えています。現状では、この部分がブラックボックスとなっており、よくわかりません。したがって、浸透に向けて具体的な方策として、我々が「学校改善シート」と教育大綱の関係を理解し、必要に応じて各学校へ具体的に働きかけること、つまり何を投げかけていくのかを明確に

していくことが一つの方法だと思います。

市長：学校名とかはいらないので学校改善シートにどんなことが書かれているか確認できますか。補足すると、教育大綱の開始当初、森田教育長は「校長が重要だ」という考えから、校長の経営力を高めるアプローチに最初に取り組ました。しかし、校長だけの力では難しいという結論に至り、授業の変化に至るにはより総合的なアプローチが必要だという認識に至っています。このように、施策の方向性については試行錯誤の中で行き来している状況です。

柳下副教育長：校長がまず教育大綱を最も深く理解することが非常に重要です。

これまでも授業改善シートは存在していましたが、今年度と過去の違いは、校長の強い思いが反映されている点にあります。校長は教育大綱の最も理解者として、その思いを描いています。一方で、授業改善シートや学校改善シートの作成は教務主任や研究主任が担当することが多いため、これらの主任が教育大綱をしっかり理解していなければ、校長の思いと現場で作られる改善シートが乖離してしまいます。連携が取れていないと、別々のシートができあがり、統一された方向性を欠く恐れがあります。そこで今回の学校改善シートでは、「幸せのアンケート」の結果を分析し、自校の課題を正確に把握して共有することを重視しました。これにより課題を明確化し、全員で共有しながら反映させる取組を、昨年度に実施し、今年度へと繋げています。

市長：学校改善シートは校長が作るのでしょうか。

柳下副教育長：教務主任や教頭先生です。

市長：授業改善シートは。

柳下副教育長：研究主任や教務主任です。

市長：授業改善シートも各先生が作るわけではなく、学校では 1 枚しかないわけでしょうか。

柳下副教育長：授業改善シートは各先生が作ります。

市長：学校としての授業改善シートは、学校で 1 枚ということでしょうかね。

他にあれば、どうぞ。

坂口委員：教育大綱を浸透させるためのアイディアとして、私の中で2点お話ししたいと思います。まず一つ目は、今年小規模特認校となった栗原小学校の事例です。栗原小学校は教育大綱を目指して大きく変革を進めており、保護者や子どもたちの声が多く届いています。フリースクールに来る子どもたちが減少したのは、学校が楽しくなったことが大きな理由だと思われます。ただ、子どもたちにはそれぞれ個性があり、全員が楽しんでいるわけではなく、様々な意見があります。子どもたちが楽しいと感じる理由としては、グラウンドを自由に使えたり、帰り道に自由に話せたり、授業の必要なことを終えた後に自由な時間があり、友達と教え合える環境が挙げられます。これらは大きなことではありませんが、子どもたちにとっては大切な要素です。一方で、大人や先生方は「学校はこうあるべき」という固定観念を持ちがちで、子どもたちの感じている窮屈さや不自由さに気付かないこともあります。子どもたちは、「どうせ怒られるからできない」といった我慢や諦めを感じており、その背景には自分の意見が尊重されない日々の積み重ねがあると感じました。特に印象的だったのは、教室で先生が子どもたちの意見をしっかりと聞き、尊重していることを子どもたちが実感している点です。これは大人の職場環境に例えると、辛い状況でも自分の声が届く職場なら頑張れるのに、声が届かないと諦めてしまうのと同じで、学校生活においても非常に重要なポイントです。私は学校以外の場で、学校生活を諦めてしまっている子どもたちの声を多く聞いており、その原因の一つに声が拾われないという経験の積み重ねだと考えています。また栗原小学校では、低学年の子どもたちは新しい教育の形を柔軟に受け入れ楽しんでいるのに対し、高学年は従来のやり方に馴染んでしまい、新しいやり方に戸惑っていると感じました。このギャップを踏まえると、教育大綱のような新しい取組は、低学年から段階的に進める必要があると感じます。幼児教育からの繋がりを基に、基盤ができていな

いと高学年での急激な変化は難しいのです。さらに、教育現場の雰囲気を決定づける一因として、保護者の感覚が大きいと考えます。このため、教育大綱の浸透にあたっては、学校や教育局の努力に加え、保護者への丁寧な説明や理解促進も不可欠です。特に高学年の保護者は受験など将来への不安から厳しい課題を求める傾向があり、その期待に応えながら教育大綱の理念を伝えていく必要があります。このように、教育大綱を浸透させるためには、低学年や幼児期から保護者も含めた広い層に働きかけることがもう一つの重要なアイデアだと考えています。

市長：結構悩ましい部分ですが、保護者問題はどうか。

森田教育長：今回は資料にないですが、そこは本当にすごく意識しているところですよ。私が子供と対談したものを昨年記事にしたのですが、先生方や保護者の目になかなか届かなかったのも、そういったことを保護者にもっともっと伝えることが大事なポイントではないかということで今取り組んでいます。

市長：今回の会議に間に合うように、僕もシェアしました。本当に、しっかり取材をして Hatch Edu の皆さんがまとめてくれています。結構なボリュームになりますけど、先生方が頑張っている内容などよくわかります。そして、いろいろな方法で広報を頑張らなくてはいという部分ですね。倉田先生どうぞ。

倉田委員：別の観点からですが、データを見て感じる課題として、授業改善における「個人追及」はつくば市ではよくできていると思います。ただ、最終的な共有化が課題だと感じています。子ども同士がこれまでの取組を共有して、自分の成果の継承ができる環境が整うことは、自信に繋がるだけでなく、お互いを理解し合い、今後の改善策を話し合う機会にもなると考えています。この点の改善が必要だと思います。また、学校としては教員同士の関わりが非常に重要であり、そのために研修の充実や情報共有の推進が不可欠だと思います。その際、トップダウンではなくボトムアップの考え方で、教員の意見

を管理職が丁寧に吸い上げ、一緒に課題や対応策を話し合い、納得感を持って全員が一丸となる体制づくりが必要です。これが組織力の向上に繋がり、学校の体制を大きく変えていくと考えています。

市長：おっしゃる通りですね。学校改善と授業改善って別のシートでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：同じです。今年度の学校改善ワークシートは、各学校の校長先生が「どのような子どもを育てたいか」をまず明確にすることから始まります。この目標設定は教育大綱の理念を踏まえて行われます。次に「子どもの現状」については、「幸せな学校づくりのアンケート」だけでなく、全国学力・学習状況調査や学校独自の学校生活アンケート、「i-check」など複数のデータを活用して分析します。さらに、教職員や授業の現状も併せて各学校で詳細に分析します。右側の欄では、子どもや教職員のどのような変化を目指すかを記入し、校内研修や教員組織の改善についても最後に書き込む構成です。重要なのは、この改善シートが一部の管理職や代表者だけで共有されるのではなく、全教員が内容を理解し、自らの授業や学級経営に活かすことです。これにより子どもたちが安心・安全に過ごせる環境作りを目指します。また、「i-check」などのツールを使い、細かい取組の進捗も可視化し、教育大綱や学校目標と取組が統一されるよう、今年度ワークシートの構成も見直しました。書き方のガイド例も用意し、5月には全校に配布済みで、それぞれの学校が実態に応じた改善シートを作成し、現在展開中です。

市長：これは校長と相談しながら、教頭が作ったのかと思いますが、すべての先生の手元にあるという認識でよろしいですか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：そうですね。学び推進訪問において授業を公開する先生方には、学校改善ワークシートを基にした授業版のワークシートを作成していただいています。これらは教員がいつでもまい照できる形で共有されており、副教育長や私たちの訪問時にも活用しています。今年度は特に、作成された学級改善シートをベースに、管理職への面談や教員への声か

けを強化し、指導の一貫性を保つ取組に力を入れています。

市長：わかりました。ありがとうございます。手打先生いかがですか。

手打委員：このワークシートはどの学校にもあるような一般的なものに見えてしまいます。教育大綱に基づいて作成・浸透させるのであれば、各学校で作る際に教育大綱との関連性がもっと明確に示される必要があります。しかし現状では、その関連が見えてこないため、教員の方々が「つくばの教育大綱に沿って授業や学校運営を行っている」という意識が十分に育っていないのではないかと感じます。いかがでしょうか。

学び推進課伏谷指導主事兼係長：今年度は、授業改善ワークシートの作成にあたり、教育大綱の理念や「幸せな学校づくりアンケート」の結果をしっかりと反映させるよう各学校に依頼しています。そのため、昨年度よりも教育大綱の意識の浸透は進んでいると感じています。各学校は、教育大綱のどの部分に重点を置くかを工夫して書いているところもありますが、一方で、今後さらにワークシート自体をより良い形に改良し、教育大綱との繋がりをより明確に示す工夫の余地があるとも感じました。

市長：ありがとうございます。大事な視点ですね。もちろん意識しながら書いているはずですが、しっかり紐づけられているか、担保できた方が良いでしょうね。和泉さんどうですか。

和泉委員：発言する前に 1 つ質問したいのですが、学校訪問はどのようなタイミングで、例えば何時からどのような形で行われているのか、簡単に教えてくださいませんか。具体的には、「今日は国語の授業を見に行く」といった特定の授業を対象に訪問するのか、それとも朝から終日訪問するのか、そのあたりの流れなどを知りたいです。

学び推進課吉村指導主事：我々が実施している学び推進訪問は、約 1 ヶ月半前に学校から打ち合わせカードを提出いただくことから始まります。そこから伴走訪問がスタートし、訪問当日までに指導主事が 2 日程度学校を訪問しま

す。この際、授業改善ワークシートを基に、焦点となる授業の先生方と対話を重ね、児童生徒の力をどう伸ばすかを具体的に話し合いながら授業計画を共同で作成します。学びのデザインは、教科の資質・能力の目標も踏まえて作り上げ、チーム編成による共同立案形式で進めます。時間が足りない場合は Teams 等のオンラインツールを活用し連絡を取り合いながら準備を進めます。訪問当日は午前 9 時頃に学校に到着し、まず校長や管理職との懇談を行います。その後、焦点授業や公開授業を参観し、午後の校内研修では指導助言や研究協議に参加します。最後に再度懇談を実施し、訪問後の具体的な対策や校内研修で重視すべき点を確認して訪問を終えます。

和泉委員：なるほど。とてもよくわかりましたありがとうございます。ということはやはり授業のための伴走、授業の改善のための伴走ということでしょうか。

学び推進課吉村指導主事：授業の改善の中にその中に教育大綱の実現ももちろん、含まれているというふうな捉えをしていただきますと、うれしいと思います。

和泉委員：わかりました。全体アンケートから抽出された課題の一つに「意欲の低さ」や「子どもたちの受動的な態度」があります。このことから、学びの基盤となる学級づくりや学級風土が弱いのではないかと強く感じました。例えば、坂口委員が指摘したように、子どもたちが自由に校庭で遊べる環境や、「先生が自分の話をよく聞いてくれる」という安心感が不足していることが浮き彫りになっています。アンケートの「先生と話す時間」が低評価であるのは、子どもたちの本音が反映された結果と考えられます。良い授業を行う前提として、安心して自己意見を表明できる居場所づくりや、ルールメイキングを含む自己決定の支援がもっと重視されるべきです。どんなに授業改善を進めても、この基盤がなければ真の学びには繋がりません。具体的な対策としては、特別活動や学校行事、朝の会や帰りの会での取組に注力することが

挙げられます。学びの改善とともに、学ぶための空間づくりを両輪として進める必要があります。振興基本計画の会議で行った子どもへのアンケートは、数値化しにくい子どもたちの思いを反映しており、その視点も踏まえつつ、これからの特別活動や課外活動の具体的な取組を深めていくべきだと強く感じました。

市長：非常に大事な視点ですね。ファウンデーションの部分が整っていないとなかなか上に行かないというのは、非常に重要な問題提起だと思います。どう思いますか、教育長。

森田教育長：本当その通りです。私たちはよく「楽しい」という言葉を使いますが、子どもたちが本当に求めている「楽しさ」と先生方が考える「楽しさ」にはズレがあるのではないかと考えています。このズレがあると、いくら努力しても数値的な成果は上がりにくい。子どもたちが求める楽しさを深く理解することが必要です。もし子どもたちの楽しさが単に「活動が楽しい」という単純なものであれば、それ以上の意味や価値を授業の中で考えさせる必要があります。このズレをなくすことが第一歩であり、そのために自己決定の感覚を授業だけでなく学校生活全体に浸透させることが重要だと思います。また、学校の状況を示す4象限の例では、子どもたちが楽しそうに見えても評価が低い学校もあり、そのようなズレをすべての学校で正していく必要があると感じています。

市長：校庭で自由に遊べるのが、子供にもたらす影響を過小評価してはいけないということでしょうね。

森田教育長：きっと小さい事象が大事なんでしょうね。

和泉委員：個人的に気になっているのは、過度に規律や規範を重視しすぎているかという点です。学習スタンダードとも呼ばれる「良い子の決まり」は、自由を保障するために必要な規律であるものの、その規律が過剰であったり、理由の説明が不十分な場合があります。例えば、校庭の利用制限について、

「この場所ではこの遊びだけ」「特定の曜日は特定学年だけが遊べる」といったルールは、安全確保の観点から設けられているものの、子どもたちに一方的に課されているのではないかと懸念しています。先生方は、経験や暗黙知に基づいて学級をまとめるためにこうしたルールを運用していると思いますが、その必要性や運用方法について改めて見直すことが重要だと、日々強く感じています。

森田教育長：そこは大分意識してやっていると思います。ルールメイキングを進めることが、「幸せな学校づくり」のルール作りの出発点となっています。子どもたちの意見を取り入れようとする基本姿勢は以前よりもかなり出てきているものの、先生方によって感覚にまだ差があるのも事実です。例えば、つくばでは授業者約 1,300 人のうち約 200 人が新任教員であり、新しい先生が理解し、実践できるようになるまでには時間がかかる状況があります。私自身、春先に訪問した際には前年より改善が見られたものの、人事配置が変わった今年度初めでは一部で逆に低下している様子も感じられ、3 歩進んで 1 歩下がるような感覚を覚えています。そのため、新しい先生も含め、繰り返し基本的な考え方やスキルを投げかけ、対話を重ねていく必要があると感じています。過去の理解だけに頼らず、持続的に取組続けることが重要だと改めて認識しています。

市長：少し思ったのは、学校がどのようなことをやっているか、我々にはわからないじゃないですか。なので、学校訪問に、教育委員行ったら邪魔ですか。

森田教育長：やってもらうつもりではいたので、やっていいと思います。

市長：ありがとうございます。みんなで一緒に考えながら進めていければと思いますし、先生方も非常に熱心に取り組まれていることは理解しております。教育委員や我々も評価を行う立場ではないですが、一緒に学校づくりを進めていけるかを考える機会にできればいいなと考えていますので、ぜひそれはやりたいなと思います。ただ、参加者が多すぎると先生方もプレッシャーに

感じてしまうかもしれませんが。

森田教育長：現状を見てもらったほうがいいと思います。

市長：そうですね。ここだけで議論しても、どうしても表面的なもので終わってしまう気がします。私自身はなかなか参加できないかもしれませんが、皆さんのご都合を最優先にさせていただき、ぜひ進めていただければと思います。

和泉委員：訪問の一環として、授業だけでなく、運動会や合唱コンクールなどの学校行事における子どもたちの関わり方や活動内容、運営の様子も見られたら良いなと思います。校庭をふらっと覗いて「こんな感じなんだ」と把握するだけでも、意味があると思います。

市長：もし案内をしなくてよいのであれば、当日の先生方の負担は非常に軽くなると思います。ただ、現状では「お茶を出さなければならない」といった慣習などがあり、その点が負担となっているため、そうした不要な対応はやめたいと考えています。

和泉委員：地域のおばさんがふらっと行くような感じで見られれば良いなと思います。

市長：学校がそれを受容できるかな。

森田教育長：行事とかルールメイキングの時間とか、特徴がある活動をしている授業一覧を用意し、お知らせする形が良いかなと考えています。

和泉委員：やはり子供の表情をすごく見たい。そこがないと「この数字だけを見ても…」と思ってしまいます。

市長：すいません、結構時間延びてしまいましたが、ずっと伴走している石井さんから最後何か一言あれば。

一般社団法人 Hatch Edu 石井：では、一言だけ。本日の話を伺い、改めて感じたことですが、教育大綱のビジョンや文面はすでに皆さんが読み、それぞれ試行されていると思いますが、それを実現していくための具体的なストーリーとしての落とし込みや各施策がどのように繋がり、どの方向性を目指して

いるのかを効果的にコミュニケーションしていくことが非常に重要だと感じました。ここでの議論を通じて、一人ひとりの先生がつくば市の一連の取組を文脈として理解し、大綱の実現をさらに推進するためには、その戦略や方向性のストーリーづくりが欠かせません。また、いつまでにどこまで達成するかという具体的な目標設定も必要かもしれません。このような内容をどのように共有・伝達していくかが、今後の大きな課題であると考えています。以上です。

市長：はい。ありがとうございました。いろいろとこういう場で話すことが大事だし、とても皆さんがいろんな取組にチャレンジしてくれていることもよくわかりました。我々も一緒に前に進んでいけるようにと思いますので、引き続きよろしくお願いします。

教育総務課山岡課長：それでは以上をもちまして、本日の会議を終了いたします。次回の議題については ICT 教育をテーマに8月下旬の開催を予定しております。本日はお忙しい中、ありがとうございました。

令和 8 年度(2026 年度)第 1 回つくば市総合教育会議次第

日時：令和 8 年(2026 年) 6 月 29 日 (月)

午後 3 時 00 分から午後 5 時 00 分まで

場所：本庁舎 5 階 庁議室

1 開会

教職員の働き方改革について（報告）

2 議題

教育大綱を浸透させるためには

3 閉会

事務局：教育局教育総務課

つくば市総合教育会議 構成員名簿

職 名	氏 名
市 長	五十嵐 立青
教 育 長	森田 充
教育委員会委員	倉田 廣之
教育委員会委員	和泉 なおこ
教育委員会委員	坂口 まり
教育委員会委員	手打 明敏

第1回総合教育会議

「教育大綱を浸透させるためには」

**幸せな学校づくりアンケートの結果
及び今後の教育大綱の浸透に向けた取組**

令和8年6月
学び推進課

1 アンケート結果

2025年 幸せな学校づくりアンケート 市全体の結果と昨年からの差分

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記！

昨年よりプラス
昨年よりマイナス

カテゴリー		質問項目	市全体(R7年度)の結果				昨年からの変化(Pt)	
			1	2	3	4	1と回答	1または2と回答
			最も肯定的			最も否定的		
① 充実感 学校が 楽しい	学校生活の 充実感	1 学校が楽しい	50%	38%	8%	3%	0.9	0.9
		2 授業の時間	28%	48%	17%	7%	0.9	0.8
		3 児童・生徒会活動(委員会活動など)	38%	39%	15%	7%	1.0	1.3
		4 休み時間	80%	17%	2%	1%	0.7	0.4
		5 クラブ活動や部活動	71%	21%	5%	3%	0.7	0.5
		6 給食の時間	63%	30%	5%	2%	0.4	1.1
		7 学校行事(運動会、文化祭、音楽会など)	72%	22%	4%	3%	0.4	0.6
		8 友だちと一緒に過ごす時間	87%	11%	1%	1%	0.1	0.2
		9 先生とお話する時間	44%	40%	11%	5%	-0.5	0.3
② 教えから 学びへ	授業の充実感	10 授業では、夢中になって学んでいる時間がある	41%	40%	14%	5%	0.4	0.0
		11 学校の授業を通して学ぶ楽しさを感じている	38%	39%	17%	6%	1.4	0.5
		12 できるようになった、わかったと思える授業が多い	46%	39%	11%	4%	-0.5	-0.3
	個別最適な 学びと協働 的な学びの 往還 (主体的・対 話的で深い 学び)	13 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている	30%	46%	20%	5%	1.4	1.0
		14 授業で学んだことを、生活の中でいかそうとしている	36%	43%	17%	4%	0.7	0.5
		15 学校の授業では新たな発見や気づきがある	44%	43%	11%	3%	0.4	0.6
		16 授業では「なぜ」「どうして」「どうやって」という気持ちをもって学んでいる	42%	40%	14%	4%	0.5	0.4
		17 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら、課題の解決に取り組んでいる	40%	42%	15%	3%	0.5	0.0
		18 つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある	39%	42%	15%	4%	0.9	0.3
		19 授業では、学習の方法やペースを自分で選んでいる	46%	39%	12%	3%	1.4	0.8
		20 授業では、自分が必要な時に、仲間と協力しながら学んでいる	59%	32%	7%	2%	-1.8	-0.3
③ 管理から 自己 決定へ	子どもが自己 決定できる 学校環境	21 授業では、いろいろな人と学ぶことで、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができている	48%	39%	11%	3%	-0.4	-0.1
		22 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる仲間がいる	65%	28%	5%	3%	0.3	0.7
		23 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる先生や大人がいる	54%	34%	8%	4%	1.2	0.9
		24 学校には、安心できる居場所がある	54%	31%	9%	6%	0.5	1.0
		25 自分の考えや意見を伝えやすい学級・学年だと思う	45%	39%	12%	5%	1.0	0.7
		26 あなたの考えや意見が大事にされていると感じる	37%	42%	15%	6%	2.1	2.0
		27 学級や学校をよりよくするために、一人一人の意見や考えを大切にしながら、みんなで話し合っている	46%	40%	11%	4%	0.1	0.9
		28 みんなのがんばりや挑戦を応援している学級・学年だと思う	55%	34%	7%	3%	0.2	1.0
④ 認知能力 偏重から 非認知能力 の再認識へ	自己調整力	29 日々がんばれるような、自分なりの目標を持っている	50%	34%	11%	5%	0.5	0.0
		30 目標に向かって、自分を振り返りながら進めている	43%	37%	15%	5%	1.1	0.1
		31 分からないことや、できないことがあったとき、なんとかしようと思う	55%	35%	7%	3%	-0.5	-0.2
	自己受容感	32 どんな学び方や進め方が自分には合うのかが分かっている	42%	36%	16%	7%	-0.4	-0.2
		33 自分には「よい」と思えるところがある	52%	32%	10%	6%	0.8	0.4
		34 自分を大切に思っている	52%	32%	10%	5%	0.7	0.5
	他者への受容感	35 自分とは違う考えや気持ちをもっている人の話でも、最初から否定しないで聞くことができる	56%	36%	6%	2%	0.4	0.2
		36 たいていのことには、「自分はきっとできる」と思って取り組んでいる	43%	39%	14%	5%	1.5	0.7
		37 自分は、失敗したとしても、その経験を次に生かそうという思いがある	47%	37%	12%	4%	0.7	0.7
	自己効力感	38 挑戦しようとする気持ちをもって、様々なことに取り組んでいる	48%	36%	12%	4%	1.0	0.8
		39 学校で困ったことがあったとき、誰かに助けを求めることができる	50%	34%	11%	6%	0.7	1.1
	自己実現	40 将来の夢や希望をもっている(あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事につきたい など)	58%	24%	10%	8%	-1.0	0.2
	社会貢献意識	41 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	42%	39%	13%	6%	0.1	0.3

市全体としては多くの項目で改善傾向

- 昨年より減少したのは以下の項目
 - できた・わかった授業の経験
 - 協働的な学びの経験
 - 自己調整、自己実現

- 絶対値をみると、昨年同様に
 - 「授業の時間(の楽しさ)」
 - 「授業の充実感(学ぶ楽しさ)」
 - 「本物の学び」
 - 「探究的な学び」(試行錯誤、つくスタ)
 - 「民主的な学校環境」(あなたの考えや意見が大事にされる)の項目を中心に伸びしろ

①幸せな学校づくりアンケート 「充実感」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← → 否定的

		市全体				
カテゴリー	質問項目	1	2	3	4	1+2
学校生活の 充実感	1 学校が楽しい	50%	38%	8%	3%	88%
	2 授業の時間	28%	48%	17%	7%	77%
	3 児童・生徒会活動(委員会活動など)	38%	39%	15%	7%	78%
	4 休み時間	80%	17%	2%	1%	97%
	5 クラブ活動や部活動	71%	21%	5%	3%	93%
	6 給食の時間	63%	30%	5%	2%	93%
	7 学校行事(運動会、文化祭、音楽会など)	72%	22%	4%	3%	93%
	8 友だちと一緒に過ごす時間	87%	11%	1%	1%	98%
	9 先生とお話する時間	44%	40%	11%	5%	84%

学校が楽しい 1: 50% 1+2: 88%

②幸せな学校づくりアンケート 「教えから学びへ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 否定的 →

カテゴリー		質問項目	1	2	3	4	1+2
授業の充実感		10 授業では、夢中になって学んでいる時間がある	41%	40%	14%	5%	81%
		11 学校の授業を通して学ぶ楽しさを感じている	38%	39%	17%	6%	77%
		12 できるようになった、わかったと思える授業が多い	46%	39%	11%	4%	85%
個別最適な学びと協働的な学びの往還 (主体的・対話的で深い学び)	本物の学び	13 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている	30%	46%	20%	5%	75%
		14 授業で学んだことを、生活の中でいかそうとしている	36%	43%	17%	4%	79%
	探求的な学び (問いから始める学び)	15 学校の授業では新たな発見や気づきがある	44%	43%	11%	3%	87%
		16 授業では「なぜ」「どうして」「どうやって」という気持ちをもって学んでいる	42%	40%	14%	4%	82%
		17 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら、課題の解決に取り組んでいる	40%	42%	15%	3%	82%
		18 つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある	39%	42%	15%	4%	81%
	個別の学び	19 授業では、学習の方法やペースを自分で選びながら学んでいる	46%	39%	12%	3%	85%
	協働の学び	20 授業では、自分が必要な時に、仲間と協力しながら学んでいる	59%	32%	7%	2%	91%
		21 授業では、いろいろな人と学ぶことで、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができる	48%	39%	11%	3%	86%

③幸せな学校づくりアンケート 「管理から自己決定へ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 1 2 3 4 → 否定的

カテゴリー		質問項目	1	2	3	4	1+2
子どもが自己決定できる 学校環境	安心できる 学校環境	22 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる仲間がいる	65%	28%	5%	3%	92%
		23 学校には、自分の気持ちを分かろうとしてくれる先生や大人がいる	54%	34%	8%	4%	88%
		24 学校には、安心できる居場所がある	54%	31%	9%	6%	85%
	民主的な 学校環境	25 自分の考えや意見を伝えやすい学級・学年だと思う	45%	39%	12%	5%	84%
		26 あなたの考えや意見が大事にされていると感じる	37%	42%	15%	6%	79%
		27 学級や学校をよりよくするために、一人一人の意見や考えを大切にしながら、みんなで話し合っている	46%	40%	11%	4%	86%
		28 みんなのがんばりや挑戦を応援している学級・学年だと思う	55%	34%	7%	3%	89%

④幸せな学校づくりアンケート

「認知能力偏重から非認知能力の再認識へ」

相対的に低いものが赤く、
高いものは青で表記↓

肯定的 ← 1 2 3 4 5 → 否定的

カテゴリー	質問項目		1	2	3	4	1+2
幸せに向かうために育んでほしい 非認知能力	自己調整力	29 日々がんばれるような、自分なりの目標を持っている	50%	34%	11%	5%	84%
		30 目標に向かって、自分を振り返りながら進めている	43%	37%	15%	5%	80%
		31 分からないことや、できないことがあったとき、なんとかしようと思う	55%	35%	7%	3%	90%
		32 どんな学び方や進め方が自分には合うのかが分かっている	42%	36%	16%	7%	78%
	自己受容感	33 自分には「よい」と思えるところがある	52%	32%	10%	6%	84%
		34 自分を大切に思っている	52%	32%	10%	5%	84%
	他者への受容感	35 自分とは違う考えや気持ちをもっている人の話でも、最初から否定しないで聞くことができる	56%	36%	6%	2%	92%
	自己効力感	36 たいていのことには、「自分はきっとできる」と思って取り組んでいる	43%	39%	14%	5%	81%
		37 自分は、失敗したとしても、その経験を次に生かそうという思いがある	47%	37%	12%	4%	84%
		38 挑戦しようとする気持ちをもって、様々なことに取り組んでいる	48%	36%	12%	4%	84%
		39 学校で困ったことがあったとき、誰かに助けを求めることができる	50%	34%	11%	6%	84%
	自己実現	40 将来の夢や希望をもっている(あんな人になりたい、こんなことがしたい、こんな仕事につきたい など)	58%	24%	10%	8%	82%
社会貢献意識	41 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う	42%	39%	13%	6%	81%	

2 市全体の取組として

相対的に数値が低い項目→今年度の重点に (伸びしろあり)

- ア どんな学び方や進め方が自分に合うかが分かっている
- イ 授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返しながら課題の解決に取り組んでいる
- ウ 学校での授業を通して学ぶ楽しさを感じている
- エ つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある
- オ 授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている
授業で学んだことを生活の中で生かそうとしている
- カ あなたの考えや意見が大事にされていると感じる

ア 「どんな学び方や進め方が自分に合うかが分かっている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自ら進んで学習方法を工夫しようとし
(例)実験の様子を動画に収めるなどの工夫が見られない
- (例)ノートを工夫してまとめている子が少ない

その様子を生み出している要因

- 児童生徒が学習内容や学習方法を選択する場面が少ない(学習の自由度が少ない)
- 学び方や進め方をふりかえる時間の設定や指導が不十分である

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・指導の個別化（多様な教材・教具の準備、その子にあった進め方）
 - ・見通し→実行→振り返りを通して、学び方・進め方のよさを学べるような自由度のある学習内容と授業展開
(自由進度学習による自己調整能力の育成)

イ 「授業では、試したり考えたり(試行錯誤)を繰り返ししながら課題の解決に取り組んでいる」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 間違えた答えを消したがる
- 時間をかけずに最短で答えを得たがる
- 教師に言われたことしかしない

その様子を生み出している要因

- < 児童生徒 >
 - 児童生徒に正解でないといけないという思いがある
 - 教科書の内容を既に塾などで学んでいるため、課題解決に取り組む意欲に乏しい
 - 指示通りの方が楽でよいと考える児童生徒もいる
- < 教師 >
 - 時間内に学習内容を教えきることを優先している
 - 教師が先回りをして教えてすぎている（指示が多い、失敗させない）
 - 穴埋め式のワークシートでの学習など、試行錯誤しにくい授業設計

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・挑戦による失敗が賞賛される学級づくり
 - ・こどもの問いから始まる授業づくり
 - ・アウトプット重視の授業展開（理解の深化）
 - ・授業の振り返りやフィードバックを通した教師の指導観の転換

ウ 「学校での授業を通して学ぶ楽しさを感じている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 「もう時間なの？」というような夢中で学習に取り組む姿があまり見られない
- 「分かった、できた」という喜びや学習が「役に立った」という実感をもてていない子が一定数みられる

その様子を生み出している要因

- 学習課題を先生が与えている
- 学習課題が学びたいものになっていない
- 児童生徒が対話するなどの活動場面が少ない
- 児童生徒が見通しをもって学習し、自分自身で解決できたという実感がもてていない

その要因に対する学び推進課の手立て

- 教師が「問いから始める授業」のよさを学べるようにする
(校内研修で活用できるものを準備)
 - ・研修用動画の作成
 - ・研修マニュアルの作成
- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性を再認識させる
 - ・活動場面の確保とその目的・ゴールの明確化
 - ・振り返りを通して自分の成長を実感させる

エ 「つくばスタイル科では、自分が感じた疑問などを解決する学びの機会がある」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自分で課題解決しようという意欲が感じ取れない
- 調べ学習が学習の中心になっている

その様子を生み出している要因

- 課題や学習内容を先生が決め与えている
- 教師が学習プラン通りに授業を進めていて、子どもに当事者意識を十分にもたせられていない
- 外部講師やフィールドワークに係る日程調整、事前調査等に時間がかかるため、調べ学習など校内で学べるものに偏りがちである
- 一人一人の探究に向き合うのが人的に困難である

その要因に対する学び推進課の手立て

- 「児童生徒の好きや得意を伸ばす探究学習」を進めるための時間を拡充
- つくばスタイル科改善のための研修会の実施（探究学習の意義、学習を進める上での改善ポイント）
- 保護者・地域との協働による探究学習の好事例の横展開（CS担当者が外部講師との連絡調整、探究学習ボランティアの募集など）

オ「授業では自分の生活に結びつけて考えようとしている」 「授業で学んだことを生活の中で生かそうとしている」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 日常生活を想起して、学習内容と結びつける力が乏しい
(例)「家の植物は日の当たる場所で元気になるから、植物の成長には日光が必要だ」と考えられない
- 学んだことを生かす姿が乏しい
(例) 数の数え方の工夫、学んだ語彙の活用
- 教科の学びが役立つと感じていない

その様子を生み出している要因

- 子どもたちの生活体験(経験)そのものの不足している
- 教師が生活場面での疑問や必要感を学習課題に結びつけていない
- 児童生徒がどのような場面で、知識・技能を活用できるかが分らずにいる
- 日常の文脈の中で学ばせていない(暗記、繰り返し)
- 学びを活用したことに対する価値付けが乏しい

その要因に対する学び推進課の手立て

- 訪問時の授業づくり伴走、各教科での研修講座にて、以下の取組の重要性の再認識を促す
 - ・体験を重視した学習活動の推進
(栽培・ものづくり活動、長さや重さなどの量感を育む活動、五感を用いた活動など)
 - ・生活上の疑問や必要感から課題をつくる
 - ・学習内容と生活との関連を考える機会をつくる
- ・パフォーマンス課題(知識・技能を活用する場面)を設定する
- ・探究学習の中で、児童生徒が各教科の知識・技能を活用した場면을価値付ける

力「あなたの考えや意見が大事にされていると 感じる」

課題が反映された児童生徒の様子【見取り】

- 自分の意見を述べようとしない子もいる
- 発言した子への周りの反応が乏しい
- 一部の児童生徒の意見だけで学級が回っている
- 差違が認められない子もいる（不平等）

その様子を生み出している要因

- 聞き合う基盤としての学級の規律が確保されていない
- 個々の個性・特性が受容されていない
- 「大事にされている」とする感じ方が、児童生徒個々によって異なる（受容、承認、称賛、採用）

その要因に対する学び推進課の手立て

○グループワーク学習(人間関係づくり)の全校展開

○ルールメイキングの推進

- ・多様な他者と協働する上で必要な約束事について対話する活動
- ・コーチングで児童生徒の思い・考えを引き出す関わり

○各校でのi-checkの有効活用 →分析からの対策

訪問時の授業づくり伴走・各教科の研修講座

- ・指導の個別化(多様な教材・教具の準備、その子にあった進め方)
- ・見通し→実行→振り返りを通して、学び方・進め方のよさを学べるような自由度のある学習内容と授業展開(自由進度学習による自己調整能力の育成)
- ・挑戦による失敗が賞賛される学級づくり
- ・こどもの問いから始まる授業づくり
- ・アウトプット重視の授業展開(理解の深化)
- ・授業の振り返りやフィードバックを通した教師の指導観の転換
- ・活動場面の確保とその目的・ゴールの明確化
- ・振り返りを通して自分の成長を実感させる
- ・体験を重視した学習活動の推進
(栽培・ものづくり活動、長さや重さなどの量感を育む活動、五感を用いた活動など)
- ・生活上の疑問や必要感から課題をつくる
- ・学習内容と生活との関連を考える機会をつくる
- ・パフォーマンス課題(知識・技能を活用する場面)を設定する
- ・探究学習の中で、児童生徒が各教科の知識・技能を活用した場면을価値付ける

ルールメイキングの推進

- ・ 多様な他者と協働する上で必要な約束事について対話する活動
- ・ コーチングで児童生徒の思い・考えを引き出す関わり



モデル校における授業公開



市内学校職員の情報交換会

グループワーク学習(人間関係づくり)

- ・ グループワークの全校展開 各学園事前研修→実践→フィードバック



- ・ 各校でのi-checkの有効活用→分析からの対策

「問いから始める授業」づくり

- ・ 校内研修で「問いから始める授業づくり」を学ぶ
よい問いとはどのような問いなのかを考える機会へ
- ・ 研修用動画の作成
- ・ 研修マニュアルの作成



つくばスタイル科のブラッシュアップ

- ・つくばスタイル科改善のための研修会の実施
(探究学習の意義、学習を進める上での改善ポイント)

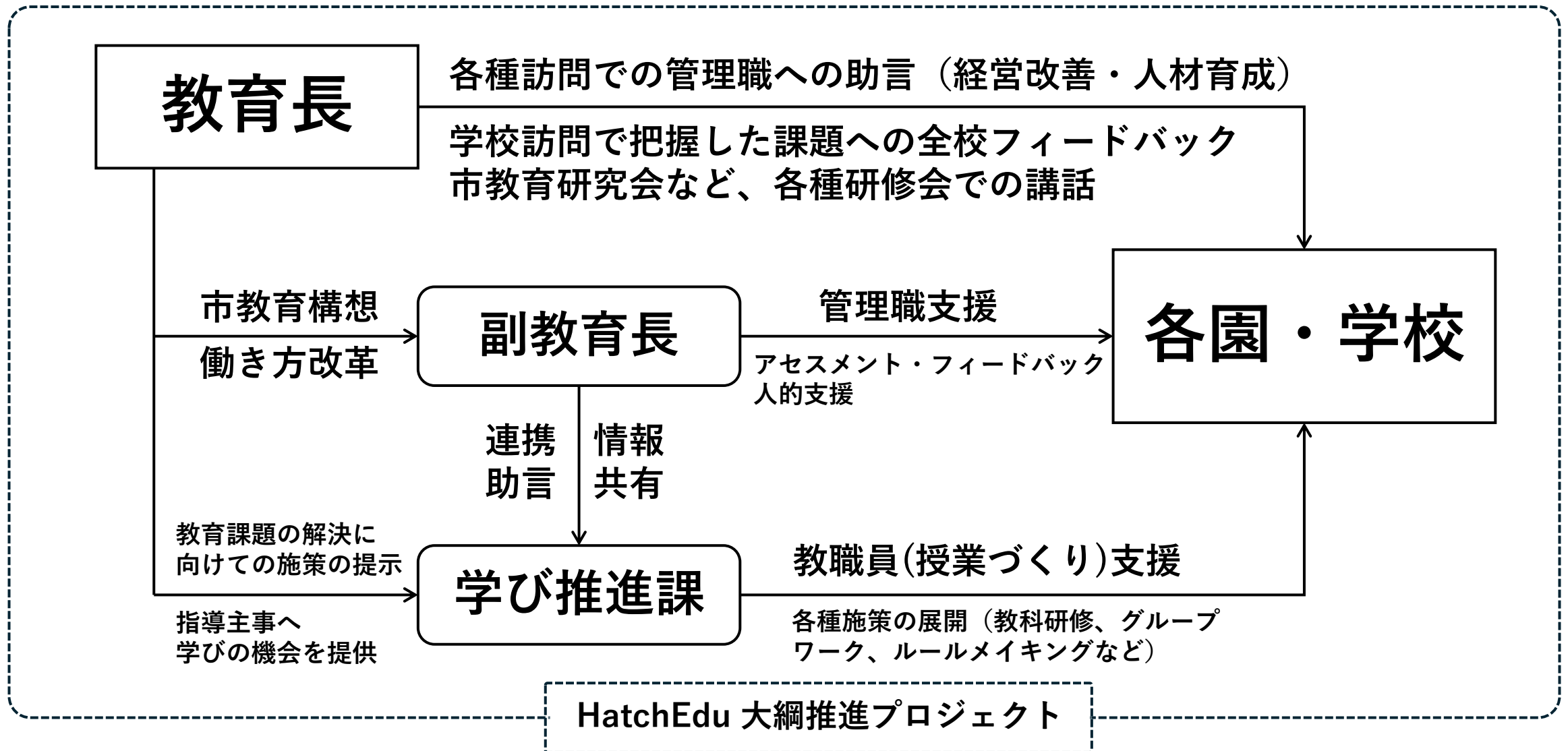


オンライン研修の様子

- ・「児童生徒の好きや得意を伸ばす探究学習」を進める時間の拡充
- ・保護者・地域との協働による探究学習の好事例の横展開
(CS担当者が外部講師との調整、探究学習ボランティアの募集など)
- ・探究学習のヒントとなる指導法の提供 (ガイドの作成)

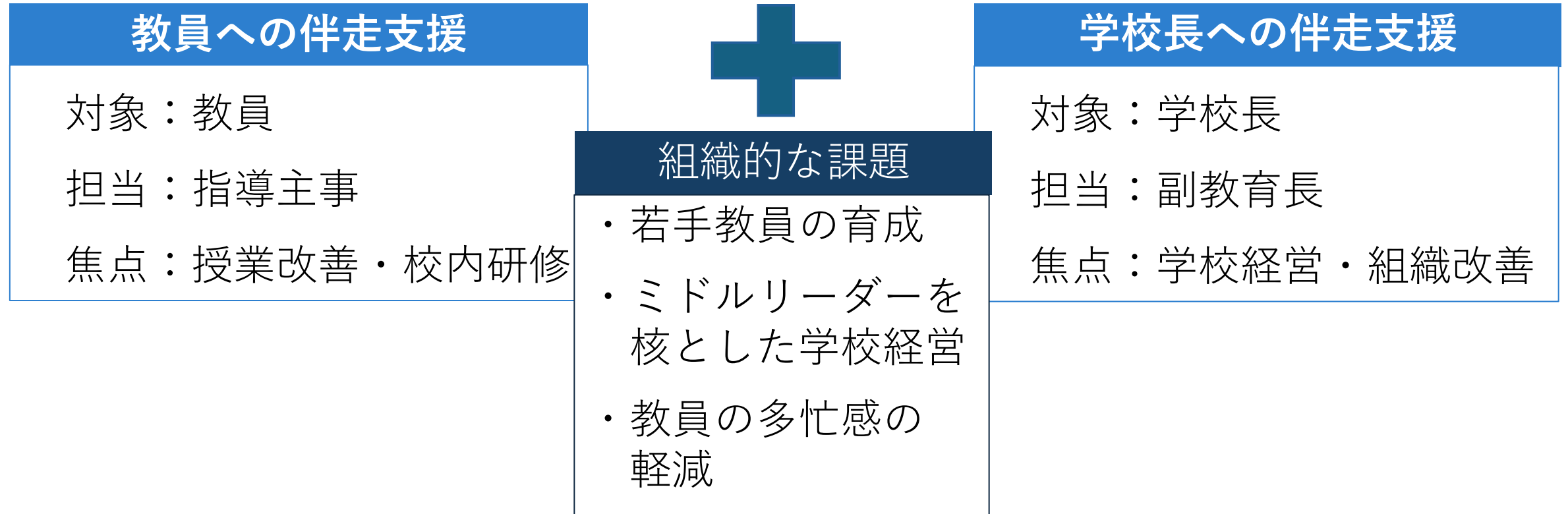
学び推進課による浸透に向けた取組

改善の取組プラス



副教育長訪問

1 実施の背景



指導主事による「授業」への伴走支援に加え、副教育長による「経営」への伴走支援が加わることで、教育大綱の具現化をさらに加速

副教育長訪問

2 取組の具体

教職員が**いきいき**と
子どもに関わる環境
学校組織の活性化



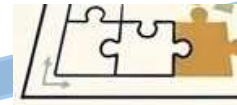
1 step 傾聴

学校長のビジョン
聞き取り



2 step 分析と助言

市アンケート等
データに基づく
実態把握と助言



3 step 共創

具体的なアクション
プラン立案の伴走

教師同士の対話の場の設定(TTB)

- ・ 教師同士が自由に対話し合える交流の場を設定

- ・ 普段の教育活動を振り返る場
- ・ これからの教育への思いを高める場
- ・ 校種を超えた人的ネットワークの構築

など

つくばの先生たちの、新しい放課後クリエイティブ会議!

TSUKUBA TEACHERS' BASE (Kick-off Party)

堅苦しいのはナシ! もっと自由に学んでいい!

「もっと面白い学校にしたい!」その思い、みんなでシェアしませんか?
ここは、正解のない探究の場。経験年数も校種も関係なし!
コーヒーとワクワクを持ち寄って、未来の学校を語り合おう!

Aコース:ホームルーム

- ・ キーワード: #安心 #仲間 #リフレッシュ
- ・ #対話 #共有 #土台作り #モヤモヤ

【今回のテーマ】
子どもたちが「最高!」
って言う学校って?
(あなたの「楽しい!」を教えて!)

Bコース:授業Labo

- ・ キーワード: #創造 #リーダーシップ
- ・ #挑戦 #探究 #協働 #授業デザイン

【開催概要】
時期: 令和8年2月27日(金) 16時~17時30分
場所: つくば市役所 (コミュニティ棟1階会議室1・2)
対象: 全教職員 (希望制) 先着50名 企画協力: みんなで作戦会議中!
問合せ先: 学び推進課 ☎029-883-1111(代表) 申込締切【令和8年2月23日(月)】

申込はこちら!

3 学校個別の取組

各校のアンケート結果・各種調査等を生かした学校改善

各校のアンケート結果・
各種調査結果の分析

副教育長訪問

行動計画作成(管理職)

学校改善シート

授業改善

学び推進訪問の活用
校内研修
(問いから始める授業
づくり)
相互授業参観
公開授業参観
学園研修

学級経営の充実

グループワーク
ルールメイキング
哲学対話
コーチング
i-checkの活用

学校組織の活性化

教育長からの助言
副教育長訪問



教育大綱のさらなる浸透に向けて

◎浸透に向けた本課の取組やその方向性について